全関西婦人連合会機関誌

婦人（ふじん）

復刻版

●全二四巻・別冊一

一九二四（大正一三）年二月～一九三七（昭和一二）年一月

本体揃価格４８万円

女性会員のみ三〇〇万人――
西日本全域の女性団体を組織し、
婦選運動をリードした
全関西婦人連合会の機関誌。
大正デモクラシーの風を受けて膨らんだ
女性解放への欲求と
女性運動統合をもくろむ体制側との
せめぎあいの状況を検証する

不二出版

西日本の女性運動の中核となった全関西婦人連合会——●復刻にあたって

本誌は、一九二四（大正13）年一二月、女性運動団体・全関西婦人連合会の機関誌として創刊された。全関西婦人連合会（全婦と略称）は、西日本全域の中産階級の女性を中心に三〇〇万人もの会員を擁し、戦前では、日本はもとより世界的に見ても最大規模の女性団体であった。

全婦は、職業婦人団体・基督教婦人矯風会のほか、西日本各地の官製・半官製婦人団体をも含めた諸婦人団体のゆるい連合体であり、その成立の背後に女性を統合しようとする文部省や内務省の意図も働いていた。しかし、次第に体制側のもくろみを越えて、男女平等教育、姦通罪など女性に不利な法律の改正、消費経済、廃娼、部落差別、民族差別、そして婦人参政権という、女性にとって深刻かつ具体的な問題に取り組むようになり、とくに婦選運動においては西日本の拠点として実に大きな役割を果たしたのである。

また、組織された各地婦人会の多くは保守的な色合いが濃く、一見、実用的修養的活動が主で家制度の枠を越えないように見えたが、女子高等教育が必要、と大会で話し合われると各地の代表者が持ち帰って女学校建設の運動をおこしたり、婦人会と名が付いても必ず男性が長であったのを女性が取って替わるなど、「婦人自治」の精神が訴えられ実行されたことは、一部のエリートだけでない広範な女性層が女性自身の手で運動をなしたという実績となった。

本誌の大きな特徴は、西日本各地の女性団体の動静をダイレクトにそして細かく報道していることである。まさに草の根で活動している無名の女性たちが何を思い、どう議論を交わしたかについても詳しく報道し、現在進んでいる各地での地方女性史研究にとって見逃せない。東に『婦選』『婦女新聞』があるなら、西には『婦人』があったのである。

広範囲の女性を動員して婦選獲得運動につきすすみ、官製団体大日本連合婦人会創立の際は断固反対し不参加を表明した一方、侵略戦争に対してはほとんど無自覚・無抵抗に体制内化してしまう、という点も合わせ、本誌は、日本女性史を把握する上で興味深い示唆を与える基本的文献である。

その歴史的意義の大きさにもかかわらず、これまでとかく東京を中心としがちな女性史研究で取り上げられることの少なかった全婦の活動をつぶさに記録している本誌を復刻し、体制側の要求とデモクラシーの風を受けて膨らんだ女性解放への欲求とのせめぎあいの状況を明らかにするものである。

恩田和子（一八九三～一九七三）
日本女子大学校卒業後、読売新聞社で活躍中に大阪朝日新聞社に引き抜かれ、社会部記者となる。全関西婦人連合会を組織するにあたっては大阪朝日の後援を得て女性団体を連合した中心となり、二七年からはその解散まで理事長を務める。
運動が実際的であっただけに、女性運動を利用しようとする国と国に要求をのませようとする会との力関係は微妙で、官製女性団体＝大日本連合婦人会創立の際、恩田和子は会を代表して敢然と不参加を表明したが、結局はなし崩し的に会員が体制内に吸収されていった。

林　歌子（一八六五～一九四六）
福井県の生まれ。一八九九年、日本基督教婦人矯風会大阪支部を設立。二六年には全国でも最大規模の支部となる。支部長として中之島に婦人ホームを新設したり飛田遊廓建設反対運動を展開するが、建設反対運動の敗北から女性参政権の必要を痛感、婦人参政権獲得運動も始める。
矯風会は全関西婦人連合会では国際組織の強みを生かして国際平和運動・婦選運動の窓口の役割を担い、林は国際部委員長を務めた。

山岡　春（一八六六～一九六四）
岸和田市の地域女性運動家。子どもが通う岸和田城内小学校に雨天運動場を建設する運動をしていた時代（一九一六年）から岸和田婦人会の活動を推進。キリスト者として婦人矯風会大阪支部の廃娼運動にも参加する一方、愛国婦人会大阪支部泉南郡の幹事ともなり、のちに岸和田分会副分会長として活躍。四二年の岸和田婦人会の解散に伴い四四年には大日本婦人会岸和田支部長となる。
一九年の第一回婦人会関西連合大会の発起人会では座長を務めた。

錦織久良子（一八八九～一九四九）
新潟県佐渡生まれ。二〇歳のときキリスト者となる。長岡女子師範学校卒業後、教員生活を送り、牧師と結婚後、大阪で女性運動・社会運動を開始。覚醒婦人協会で職業婦人の運動を組織し、全婦では政治部委員長として、姦通罪など女性に不利な民法の改正に精力的に取り組む。家事調停法案にも取り組み、戦後は運動の結実となった大阪家庭裁判所で調停員を務めた。

平岡初枝（一八九一～一九七八）
富山県の小学校教員として処女会や婦女会など官製女性団体の組織化に積極的に取り組む。
一九二五年全関西婦人連合会大会に出席、三〇年から県連合婦女会の専従活動家になり、全婦で活躍、第一回全日本婦選大会で全婦を代表して祝辞を述べる。全婦との関わりをきっかけに社会民衆婦人同盟に参加、三五年無産婦人同盟大阪支部の創立に際しては書記長となる。

北村兼子（一九〇三～一九三二）
関西大学法律学科で女性でただ一人の大学生として在籍中、『婦人』に「法律を学ぶ私」を発表、大阪朝日新聞社の大江素天に認められ、記者に採用される。批判精神に満ちたウイットのある文章力と物おじしない行動力で大活躍、『婦人』にも性差別社会を撃つ記事を多数発表。二五年には第七回全関西婦人連合会大会代表者会で司会を務めた。退職後、二八年には汎太平洋婦人会議に日本代表の一人として参加。『婦人』などに発表した文章を集めた著書は多数。

●本文見本　創刊号（一九二四年一二月号）

會議表代

覺めた婦人と其の會合

年と共に熱心の度を加へる

第六回全關西婦人聯合大會代表者會

新生の叫びをあげてから六年歩一歩力強き歩を踏みしめつゝ女性の文化のために活動し、殊に昨年の關東の大震災に際し最も大なる貢獻をなした全關西婦人聯合會は其の第六回を十一月一日から開催、午前九時大阪朝日新聞社樓上に於て先づ代表者會を開いた、開會の挨拶と共に參集の代表者はつゝましく着席、兩側の傍聽席には東京國際聯盟協會の松下芳男氏を始め遠く群馬、德島、島根の各縣からはるゝ來聽者もあり、東京、大阪の婦人雜誌記者や支那女學生なども交つて異彩を放つた

自覺と熱誠と愛と

朝日新聞社上野專務の挨拶

司會者東京朝日新聞記者竹中繁子女史の紹介にて朝日新聞社上野專務は滿場の拍手を受けつゝ登壇全關西婦人聯合會が女性文化のためにさゝげた過去の功績について語り全關西婦人聯合大會を開くに當り一言御挨拶申します、本大會も大正八年の創立以來、常に相當の仕事を相當の發達をして來たのであります、極く近い例を申しますなれば昨年の關東の大震火災に際しましては同胞救濟の爲めに、寒さに惱む人の爲めに募集して暖り、夏の蚊に苦しむ人の爲めに蚊帳を寄贈したのであります、これは婦人の溫き同情の溢れであると思ひます、又今年になつて聯合會が移民問題の爲めに米國大統領、國際聯盟に送たのは人類の平和、正義自由の爲に働いた著るしい例であります、

しかし此等の例は記憶に殘つて居るから例として擧げたまでゝあつて、この外にも、我關西婦人聯合大會が婦人の自覺と婦人の地位向上の爲めにもつと深いもつと厳い仕事をして來たことを堅く信ずるのであります、今後も婦人一個として、婦人會として、又婦人會の聯合として婦人の自覺と婦人の地位向上の爲め、十分努力せられんことを希望します、婦人として正しく活きる爲めには正しかざるもの、不正義なものに對しては極度の潔癖であらねばなりません、正しく活きる爲めには火の如き熱誠がなければなりません、皆さん方が自覺と熱誠と愛とを以て協力一致、日本女性の爲め正しい世紀を開かれんことを切に希望します

議長委員の指名

斯くて議長、副議長、委員の選擧に移り選擧を略し主催者の指名することゝなり議長に櫻德婦人會安田靖子女史、副議長神戸女子神學校綾田安子女史を指名決定し尙ほ代表者會に於ける委員十八名（出席者各府縣から一名づゝ）指名した、終つて議長、副議長それ〴〵座に着き滿場の拍手裡に司會者より紹介あり直に議事に入る

國際平和の運動

議長より議事を覽始する。

關東側の感謝

次いで提案報告に先立ち主催者より各婦人會から數に提出せられたる多數の提案選定について報告するところあり、竹中女史は『昨年の震災に對し聯合會より寄せられた厚意は到底筆舌のよく表はすところではありません』と冒頭して

救恤品の募集に際し全關西婦人聯合會の皆樣方は寢食もお忘れになり、塵と汗に塗れて目ざましい活動を續けて下さいました、そのお蔭で同情の結晶は山と積まれました、皆樣が斯うした御活動の模樣を承つた東京の婦人は強い刺戟を受けずにはゐられませんでした、そしてこの刺戟は遂に東京に於ける四十三の婦人團體が、宗教とか境遇とか事情とかの從來の行懸りを一擲して堅く團結し、救恤品の配給は固より、引續き教育、祇會、平和、育兒、勞働など凡ゆる問題に向つて活動を起しました、今も尙最も合理的に有意義にこれを續けてゐますが、從來ややもすると眠つてゐたやうな婦人團體が斯く結束して活動するに至つたのも、畢竟關西の婦人方の御活動に刺戟された結果に他ならないのであります。

と感謝を兼ねた報告をした

●推せんの言葉（五十音順）

文化史・生活史の宝庫

石月静恵

『婦人』は全関西婦人連合会の機関誌である。この会の前身である婦人会関西連合大会は、一九一九年一一月に開催され、平塚らいてうが新婦人協会の創立趣意書を配ったことで知られている。一九二三年の第五回大会で全関西婦人連合会と改称し、翌年機関誌を発刊した。

大阪朝日新聞社の主催に始まった同会は、東海・北陸・近畿・山陽・山陰・四国・九州で連合大会を開催し、県や市単位で連合会組織を結成した地域もあった。したがって、『婦人』は、各地の連合大会や連合会の情報を載せており、地域女性史研究を深める上で重要な資料といえよう。また、「婦女売買問題号」も出されており、女性の参政権・女子教育・廃娼・物価・職業・育児など幅広い女性問題が扱われている。

それとともに、女性向け総合雑誌としての機能ももっていた。衣食住はもちろん、医療や文化――ファッションや映画なども含めて――にも目を向けている。新聞社が関与していただけに、当時の女性の生活や要求を反映した誌面づくりがみられる。文化史や生活史の視点からも資料の宝庫といえるであろう。

全関西婦人連合会について研究をはじめた一九七〇年代に、大阪の朝日新聞社でようやく『婦人』を目にしたとき、復刻版があれば、女性史研究に役立つのにとおもった。このたび実現したことを歓迎したい。

（いしづき・しずえ　愛知女子短期大学助教授）

一九二五年（大正一四）

新しい女性史へ向けて

上野千鶴子

フェミニズムとナショナリズムの関係は、今、もっともホットなテーマのひとつである。国民国家の相対化にともなって、女性が国民国家の形成にどう関与したかが、ことあらためて問題化されている。女性は国民国家から、排除されたのか？　女性は参政権を要求することで国民国家の一員と見なされていたのか？　女性は国民国家の事業にどう巻き込まれたのか？　全関西婦人連合会のような体制内的女性団体を研究することは、それらの問いに答を与えてくれる。そしてそれがいずれ戦時下の翼賛体制に巻き込まれていく道筋をも明らかにしてくれる。

女性がになう運動がつねに弱者の運動とは限らない。国家や体制に加担していくことで女性もまた、加害の共犯者になりうる。その事情は今も変わらない。と同時にその過程で、女性が自発性や創意を発揮する生き生きした活動の場を見出したという逆説もまた真実である。女性史を「被害者史観」や「エリート史観」から解き放ち、女性の「主体性」と国家との共犯性や対抗性を緻密に解きあかすことが求められている。『婦人』の復刻はそのための貴重な史料となるだろう。

（うえの・ちづこ　東京大学教授）

西日本の女性たちの結集

小山仁示

大阪中之島の中央公会堂を埋め尽くした四〇〇〇人の女性たち。まさに立錐の余地もない光景だが、それが黒髪に和服の女性ばかり。男性の姿は一人も見られない。今から八〇年近くも前、一九一九（大正八）年一一月二四日の第一回婦人会関西連合大会を報じた『大阪朝日新聞』掲載の写真である。

帝国憲法体制下、家父長家族制に束縛され、政治的権利を剥奪されていた女性が四〇〇〇人も一堂に会した。近畿、山陽、四国はもとより、遠く東海、北陸、さらには九州の各地からも女性団体の代表が参集した。この事実は、現代の私たちを圧倒する。

こうして発足した全関西婦人連合会は、昭和初期、婦人参政権請願運動に取り組むなど、女性の地位向上に大きな役割を果たした。しかし、「満州事変」以降、日本の中国侵略に積極的に協力した。一九四一（昭和一六）年一一月、最後の第二二回大会の模様を報じた『朝日新聞』は「今ぞ力強い『廻れ右』日本婦人の伝統に生きん」との見出しをつけた。この団体が日本の近代女性史を直視する上で、重要な位置を占めていることが判っていただけよう。

このたび、全関西婦人連合会の機関誌『婦人』が復刻されることの意義は大きい。四半世紀前、石月静恵さんが研究テーマに取り上げた当時、『婦人』の所在さえ定かでなかった。感無量である。全号が多くの人びとの目に触れられるようになったことを喜び、研究の進展に役立って欲しいと思う。

（こやま・ひとし　関西大学教授）

一九二九年（昭和四）

全婦と民族問題

宋連玉

全婦は西日本の地域婦人会を主勢力にした巨大なネットワークであったそうだが、その全婦が本部を置いた大阪は早くから朝鮮人集住地域である。しかも特に女性は東京や京都と違って大部分が非エリートであったため、民族解放・女性解放を掲げたエリート女性の運動体「槿友会」は支会を設置することができなかった。全婦が大阪に住む朝鮮人女性と直接の交流を持ったようには見受けられないが、植民地から最も多く朝鮮人を吸収した大阪で朝鮮人の実態を知る機会が比較的多かったせいか、創刊号に失業朝鮮人の消息が伝えられている。

このような全婦の持つ組織的特性が体制的朝鮮観・アジア観をどう越えたのか、越えられなかったのかは、大いに興味の持てるところである。大枠においては体制的朝鮮観やアジア観を意識的に批判するものではないが、修学旅行で朝鮮を訪れた時の旺盛な好奇心や無邪気な朝鮮観（一九二五年）、あるいは植民地に生活する日本女性の生活意識批判、朝鮮における男女共学制主張（一九三三年）など、体制的朝鮮観をはみだすおもしろさを見いだすこともできる。

また全婦の活動として注目されるのは、一九三四年から満州語と蒙古語の講習会を開設していることである。統治した民族に日本語を強要した当時の「国語政策」からは考えられないことであるが、他民族の言語を学ぶことが何をもたらしたのか、朝鮮史を学ぶものにとっては知りたいところである。

（ソン・ヨンオク　朝鮮近代女性史研究者）

大正デモクラシーのうねりを体現するもの

松尾尊兊

一九二五年に普選法が成立すると、「普選より婦選へ」の合言葉のもとに、婦人参政権問題が政治の表舞台に登場した。当初は少数の有志議員が提出した参政権法案を、一九二八年以降には政友・民政の二大政党が競争的に取上げ、一九三一年には浜口民政党内閣が公民権法案を政府案として提出し、衆議院を通過するにいたった。第一次大戦後の普選運動の昂揚期にさえ予想もできなかった婦人参政権の急速な政治問題化が、何によってもたらされたかは大きな謎である。それは市川房枝ら東京の少数の先覚者の活動だけでは説明がつかぬ。広汎な婦人大衆の政治的自覚の高まりが想定されねばならない。商都大阪を中心に、西日本一帯の婦人団体を網羅し、三〇〇万人もの会員を有した関西婦人連合会こそが、婦人大衆の政治的自覚を体現したのではなかろうか。官製・半官製のいわゆる体制内的婦人団体を多数抱えこむ連合会の中で、どのように婦人の自立への意志が貫徹して行ったのか、また行かなかったのか。大正デモクラシーのうねりの実態を究明する手がかりを、復刻版の『婦人』は与えてくれるであろう。

（まつお・たかよし　京都橘女子大学教授）

不二出版刊行の
関連図書

日本キリスト教婦人矯風会＝刊

婦人新報

——全60巻・別冊1

○明治21年～昭和33年刊
○別冊＝解説（五味百合子）・総目次・索引
○菊判・上製・総30、000頁
○本体揃価格＝840、000円

日本で最も古い歴史をもつ女性団体＝日本キリスト教婦人矯風会の廃娼運動・婦人参政権運動など人権・女権運動の軌を辿る基礎資料。

福島四郎＝主宰

婦女新聞

——全68巻・付録2

○明治33年～昭和17年刊
○付録＝①「婦人界三十五年」②記事・執筆者索引
○本体揃価格＝1、000、000円

公娼廃止・母性保護・女子教育・婦人参政権など女性に関するありとあらゆることを四二年の長きにわたって報道し論じた貴重資料の復刻版。

婦選獲得同盟機関誌

婦選

——全19巻・別冊1

○昭和2年～昭和16年刊
○別冊＝解説（松尾尊兊・兒玉勝子）・総目次・索引
○A4判・A5判・B5判・上製・総7、572頁
○本体揃価格＝295、000円

一九三〇年をピークに盛り上がった婦選運動の中核となって、参政権・公民権・結社権の獲得を求めた婦選獲得同盟の足跡を辿る資料。

奥むめお＝主宰

婦人運動

——全30巻・別冊1

○大正12年～昭和16年刊
○別冊＝解説（鈴木裕子）・総目次・索引
○A5判・B5判・上製・総9、938頁
○本体揃価格＝300、000円

常に生活者であり労働者である女性の立場にたち、「婦人消費組合協会」「婦人セツルメント」「働く婦人の家」設立などに尽力した職業婦人社の、女性の連帯を求めた運動の記録。

戦前女性運動［雑誌・機関誌］の系譜

一八八五（明治一八）　九〇　九五　一九〇〇　〇五　一〇　一五　二〇　二五　三〇　三五　四〇　一九四五

- 思想
  - 家庭之友（1903～08）
  - 婦人之友（1908～）
  - 婦女新聞（1900～42）
  - 世界婦人（1907～09）
- 政治・女権
  - 女性同盟（1920～1922）
  - 女性展望（1936～41）
  - 婦選（1927～35）
  - 婦人（1924～37）
  - 職業婦人（1923）
- 労働
  - 婦人運動（1925～41）
  - 婦人と労働（1924～25）
  - 民衆婦人（1928～32）
  - 友愛婦人（1916～17）
  - 婦人戰旗（1931）
  - 働く婦人（1932～33）
- キリスト教
  - 婦人矯風会雑誌（1893～95）
  - 東京婦人矯風雑誌（1888～93）
  - 婦人新報（1895～）
  - 廓清（1911～45）
  - 女子青年界（1912～44）
  - 明治の女子（1904～12）

『婦人』関連年表

年号		全関西婦人連合会・『婦人』関係	関連事項
一九一九年（大正8）	11	第一回婦人会関西連合大会開催 大阪朝日新聞社主催、恩田和子・竹中繁子が中心	三・一運動 五・四運動
二〇年	10	第二回大会。廃娼・結婚制度改善・民法上の女性の地位向上を議論	新婦人協会発会
二一年	10	第三回大会。平和の決議　物価調節・朝鮮女性教育問題	覚醒婦人協会創立。全婦に参加
二二年	5	治警法改正記念政談講演会を開催	ワシントン会議
	10	第四回大会。部落問題、女子教育拡充問題を討議。各県に持ち帰れ高等女学院開校運動が展開	京都で水平社、創立
二三年	10	第五回大会。婦人会関西連合会を全関西婦人連合会に改称。震災地救援・朝鮮人の問題	治安警察法第五条一部改正
二四年	10	第六回大会。教育・農村振興・女性の職業・廃娼問題。婦人参政権問題は時期尚早論が多勢を占める	婦人参政権獲得期成同盟会結成
二五年	12	機関誌『婦人』を創刊	婦人参政権獲得を決議、五一議会に請願決定
	10	第七回大会。公民教育・婦女児童売買・女性労働問題などを討議。婦人参政権獲得を決議、五一議会に請願決定	男性のみの普通選挙法成立 治安維持法成立
二六年	10	『婦人』婦女売買問題号	
	11	第八回大会。母子扶助法制定・公娼廃止・地久節（皇后誕生日）を全国婦人デーに	
二七年	1	本格的に婦選運動を開始	
	3	理事長恩田和子、数万人の署名を携え貴衆両院に提出。署名数は年毎に拡大、三〇年には一〇万人に	丹後大震災。全婦慰問班を組織し救援
	11	第九回大会。公民権獲得が先かどうかの議論。今大会から大阪朝日新聞社から独立、「婦人のための婦人の自治」を目指し、理事制に	汎太平洋婦人会議開催 大日本連合女子青年団発会
二八年	1	この年、「御大典」のため大会中止	
二九年	1	婦選運動に関し、東京の婦選獲得同盟と提携	
	4	第一〇回大会。経済国難にあたっての女性の役割	
	9	全日本婦人経済大会開催。浜口内閣の緊縮政策に対応、輸入抑制・物価低下・婦人産業組合組織・消費節約問題を討議	
三〇年	3	全婦、婦選三案請願書提出のため三〇万署名運動開始	廃娼連盟主催、廃娼デー
	11	第一一回大会。法律上の男女不平等問題・女性労働者の保護・婦人方面委員制度	大阪に優生児相談所
	12	第二回全日本婦人経済大会 『婦人』消費組合特集号	第一回全日本婦選大会。全婦は後援団体のひとつ
三一年	2	第一回大会で大日本連合婦人会への不参加を決議	婦人公民権法案、衆議院本会議で初めての可決
	11	第一二回大会。日本の軍事行動に抗議する上海の女性団体に対し、日本軍を擁護する電報を打つ。全国婦人融和事業連盟の女性による部落差別問題解決への提議	大日本連合婦人会創立 社会民衆婦人同盟大阪支部、飛行機で母子扶助法案・徹底婦選案のビラまき
三二年	11	日満婦人連合第一回大会及び全関西婦人連合第一三回大会。日満の共存共栄のための女性の役割	最初の普通（男性のみ）選挙 婦人消費組合協会設立 婦人市政研究会、ガス非買同盟結成
三三年	11	第一四回大会。非常時経済と日満協力における女性の役割	日満婦人協会創立 婦選獲得同盟、東京婦人市政浄化連盟を組織
三四年	11	第一五回大会。関西での風水害救援・麻芥半減運動	母性保護法制定促進婦人連盟結成
	11	東北凶作地学童救援の該当募金活動開始	改正工場法施行、女性・年少者の深夜業廃止
三五年	10	第一六回大会。母子ホーム建設・家事調停法制定の建議案作成	選挙粛清婦人連合会結成会
三六年	2	公娼廃止一大婦人デモに参加	
	12	第一七回大会。母子扶助法制定・民法改正問題	
三七年	2	『婦人』改題して『婦人朝日』となる（本復刻は改題前まで）	蘆溝橋事件
	10	第一八回大会を「非常時大会」と銘打って開催。非常時協力・銃後の奉仕	大日本連合婦人会・大日本女子青年団 女子義勇隊結成運動 日本婦人団体連盟結成
三八年	8	出征兵士への毛布献納運動	
三九年	11	第一九回大会（非常時大会）	日本婦人団体連盟主催の時局婦人大会
	11	第二〇回大会（非常時大会）。貯蓄報国・銃後の家庭生活刷新・道路拡張など奉仕作業や救急訓練を実施	婦人時局研究会発表会
四〇年	10	第二一回大会（非常時大会）	
四一年	11	第二二回大会（非常時大会）。女性の動員・国防訓練	婦選獲得同盟解散
四二年	11	新日本婦人会発足（恩田和子ら）	
四五年	2	日本主婦の会発足（恩田和子ら・大阪朝日新聞社後援）	大日本婦人会発会
四六年	8		日本敗戦

『婦人』主要執筆者一覧

赤松　明子　麻生　久　阿部　艶子　飯島　幡司　生田　春月　生田　長江　生田　花世　石井　漠　石原　清子　石原　純　石本　静枝　板垣　直子　市川　房枝　井上　秀子　伊福部敬子　今井　邦子　岩崎　盈子　円地　文子　大江　素天　大田　洋子　大妻コタカ　岡田八千代　岡本　一平　岡本かの子　小口みち子　小寺　菊子　奥　むめお　恩田　和子　嘉悦　孝子　賀川　豊彦　勝目　照子　金子しげり　神近　市子　河崎　なつ　川島　つゆ　北川　千代　北村　兼子　久布白落実　窪川　稲子　栗林　貞一　高良　富子　小口みち子　東郷　青児　富田　砕花　中河　幹子　中本たか子　新居　格　西脇りか子　服部　亮英　林　歌子　原田　琴子　平岡　初枝　平塚らいてう　高橋　千代　高群　逸枝　竹中　繁子　竹久　夢二　田中　千代　帆足みゆき　星野　愛子　穂積　重遠　保良せき子　前川　千帆　松瀬　青々　松田　解子　松村　又一　丸岡　秀子　水島爾保布　水谷八重子　水町　京子　溝上　泰子　宮島　麗子　三輪田元道　村岡　花子　望月くに子　望月百合子　森田　たま　守屋　東　山岡　春子　山川　菊栄　山田やす子　山田　わか　与謝野晶子　吉岡　弥生　吉屋　信子　若山喜志子　実生すぎ子　三宅やす子　平林たい子　深尾須磨子　藤田進一郎　藤田　徳松　ノブ　城山登美子　城　密　陶山　嘉男　高瀬　高野岩三郎

創刊号（一九二四年一二月）

婦人

復刻版概要

全二四巻・別冊一

一九二四（大正一三）年一二月～
一九三七（昭和一二）年一月
B5判・上製・総九、八六〇ページ
解説＝藤目ゆき

本体揃価格＝四八万円

別冊＝解説・総目次・索引
＊別冊のみ分売可
本体価格＝三、〇〇〇円

復刻版配本案内

復刻版巻数	原本巻・号数	発行年月	配本
第一巻	第一巻第一号～第二巻第六号	一九二四・一二～一九二五・六	第一回 一九九六年五月 八〇、〇〇〇円
第二巻	第二巻第七号～第一二号	一九二五・七～一二	
第三巻	第三巻第一号～第六号	一九二六・一～六	
第四巻	第三巻第七号～第一二号	一九二六・七～一二	
第五巻	第四巻第一号～第六号	一九二七・一～六	第二回 一九九六年九月 八〇、〇〇〇円
第六巻	第四巻第七号～第一二号	一九二七・七～一二	
第七巻	第五巻第一号～第六号	一九二八・一～六	
第八巻	第五巻第七号～第一二号	一九二八・七～一二	
第九巻	第六巻第一号～第六号	一九二九・一～六	第三回 一九九六年一二月 八〇、〇〇〇円
第一〇巻	第六巻第七号～第一二号	一九二九・七～一二	
第一一巻	第七巻第一号～第六号	一九三〇・一～六	
第一二巻	第七巻第七号～第一二号	一九三〇・七～一二	
第一三巻	第八巻第一号～第六号	一九三一・一～六	第四回 一九九七年五月 八〇、〇〇〇円
第一四巻	第八巻第七号～第一二号	一九三一・七～一二	
第一五巻	第九巻第一号～第六号	一九三二・一～六	
第一六巻	第九巻第七号～第一二号	一九三二・七～一二	
第一七巻	第一〇巻第一号～第六号	一九三三・一～六	第五回 一九九七年九月 八〇、〇〇〇円
第一八巻	第一〇巻第七号～第一二号	一九三三・七～一二	
第一九巻	第一一巻第一号～第六号	一九三四・一～六	
第二〇巻	第一一巻第七号～第一二号	一九三四・七～一二	
第二一巻	第一二巻第一号～第六号	一九三五・一～六	第六回 一九九七年一二月 八〇、〇〇〇円
第二二巻	第一二巻第七号～第一二号	一九三五・七～一二	
第二三巻	第一三巻第一号～第六号	一九三六・一～六	
第二四巻	第一三巻第七号～第一四巻第一号	一九三六・七～一九三七・一	

1996年度刊行分　1997年度刊行分

●本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。お近くの書店にご注文ください。

不二出版
東京都文京区向丘一－二－一二　〒一一三
TEL〇三（三八一二）四四三三
FAX〇三（三八一二）四四六四
振替〇〇一六〇－二－九四〇八四
一九九六・四